

iPS細胞作製で山中伸弥がノーベル賞を受賞した。まあ、そのことはすごいことで、難病や先天的な疾患に苦しんでいるひとの助けになるだろう。

そのことよりも今回のノーベル賞受賞に絡んでiPS細胞を心筋移植したと名乗り出た「虚言癖」の人物に興味をそそられた。まあ、ひとは嘘をつかずに生きているひとなんてひとりもないだろうから多少の嘘はみんなついているわけで、そのことがいけないとおもわれないが、ほくなど臆病で小心者だから、かならず嘘だとわかってしまうだろうことは公の席では控えるようにしている。

この虚言癖男の、おこなってもいない心筋移植を実施していたなんて嘘はかならず破綻することはわかっていただろうに、マスコミを集めて平然と嘘をついてしまう。そのことに興味を持った。

かれは他人の注目や関心を集めることに生き甲斐を感じる性格なのだろう。だからその欲望に逆らえず、つい目と鼻の欲望に浸ってしまった。かれにとっては、現実の自分と想像上の自分が一体化してしまったといっているのだろう。「こうありたい自分」をつくりだして、それをだれかに認めてほしいと願う。こんなわたしを見てほしい、と切なる願いがある。

それはそれで、だれにでもある願望だからある程度はしかたないだろうし、ほくのような臆病で小心者は当然「ある程度」で辛抱してしまうのだが、この虚言癖男は周囲の人たちをおおきく巻き込むことでよりいっそうの愉楽を感じてしまっている。

うな口調で、ギブアップをしかけている人間をさらに蹴落とすような勢いだった。まあ、それが仕事なんだろうけど。

もう半年ぐらい前のことだろうか、通学途中の児童の列に車が突っ込んだ事件があった。そのとき、加害者に警察が被害者の父親の携帯電話を教えたことが問題になり、警察幹部が被害者の父親の前で頭を下げている映像（土下座というのに等しかったが）が放送されたことがあった。被害者の父親が罵声を浴びせ、警察幹部がひたすら頭をさげている映像が流れた。

報道という名目で被害者の父親が罵声を浴びせている映像を流してかれらはなにをいいたいのだろうか、とおもった。個人情報をもらした警察の不手際だろうか、それとも普段から抱いている警察幹部にたいする屈折した感情だろうか、とおもいながら見ていた。まあ、かれらにしてみれば「正義」なんだろうが。しかし、その席での「被害者の父親の怒り」という感情をそのままTVで流すことが必要だったのだろうか。被害者の父親もTVがはいっているからついつい大きな声になり、罵声を浴びせ、罵倒するという興奮状態に陥ったとおもいますが、被害者遺族の感情の昂ぶりをあおっていただけのような気がした。（結局、加害者に被害者の携帯番号を教えたのは小学校の教頭だったというおまけ付きだったが）

野田某というひととは日本の国の総理大臣だから、それなりの敬意を払わなければならないだろうが、いま、野田某一派がやっていることをみると、野田某一派の自己保全と権力執着を

それもノーベル賞というでっかい船に乗っておおボラを吹いてしまった。もつとも、これぐらいの虚言でなければかれの欲望は満足できなかったのだろう。

そういう意味では、かれは虚言を捏造することで理想的な自己の実現、あるいは、周囲にたいする欲望を満足させてしまつたといえるだろう。それは「検証すればわかってしまう虚言」という客観的な事実よりも快樂的で、充足的で、愉楽にみちた一瞬だったのだろう。

フロイトは小児のころの正常な自己愛と、思春期以降の異常な自己愛を分けて考えているが、この虚言癖男は自己愛から対象愛への正常な移行ができなかった人物のような気がする。

だから、かれには虚言を弄して世間を騒がしている、という認識はないのかもしれない。

まったくお騒がせなひとだったが、目を泳がせ、貧乏揺すりをしながら、素人のほくにもつじつまの合わない話だなおもわせる記者会見なんかを見ていると、このひとはこういうひとなんだな、と納得してしまうしかない。そういうひともあるのだ、と。

が、マスコミといわれるひとたちの傲慢さというか居丈高な態度には唾然としてしまった。アメリカでの記者会見のとき、目が泳ぎ、しどろもどろで弁解をしている虚言癖男にむかって日本のマスコミといわれる人たちが、ほくにしてみれば、死者に鞭打つような勢いで追求していた。たしかにかれらは、虚言癖男の犯罪をあげたて、糾弾しようとしていたのだろう。それはそれでかれらの仕事かもしれないが、その口調は「自分たちは正義だから、なにをどう責めたててもいいんだ」というよ

あばきたて糾弾するのが仕事ではないのかとおもってしまうのだが。スタジオの解説なんかでは、野田某の無為無策を責めたてているが、実際、記者会見のニュースなどを見ていると、虚言癖男に突っ込んだぐらいの居丈高な態度を見せることはない。山中教授の業績に乗っかって虚言を吐いた男よりも、震災復興の手助けもできないで、自己保身に汲々としている野田某一派の瑕疵のほうがひどいのではないかとほくはおものだが（そんなに総理大臣という地位は楽しいだろうか）。まあ、マスコミが権力に弱いというのはいまにはじまったことではないが、弱いものには強く、強いものには弱い態度がかれらの正体なんだろう。

その昔、佐藤栄作という人が総理大臣を辞めるとかで記者会見を開いたときのことだが、新聞などのマスコミは嘘を書くから、TVだけがこの場に残ってもらって新聞関係は出ていってくれ、といっている出たことがある。結局、新聞関係は退席し、TVだけが残った。そのとき若かったほくはおもったものだ。TVも出ていけばいい、と。辞任会見をどのメディアも伝えなければいいではないか、と。総理大臣なんて書かれてなんぼ、みたいなどころがあるのに、TVだけは真実を伝えているなんていわれて、TVだけが佐藤栄作の要求にしたがうのはおかしいではないか、とおもったことがあった、と昔のことをおもいだしたが、いまでは、どっちもどっち、オシッコとションベンのかけあいだったような気がする。

TVだって嘘をつく。編集作業という過程で嘘をつく。取材した映像を編集者の都合のいい場面だけをつなぎあわせればそ

れでいい。かつてNHKのドキュメンタリー番組が、取材した主催者の意図をねじ曲げたと裁判沙汰になったことがある。同じ取材対象でもどこをどう編集するかでまったく違った画面になってくる。TVだって嘘をつく。

TVも嘘をつく、といいながらこんなことをいうのはどうかとおもいますが、大阪市長の橋下某はTV画面でしか見たことがないがどうも好きになれない。会って話をすればいい人かもしれないが、TV画面のなかの橋下某は好きになれそうにない。

その橋下某が週刊朝日に怒っている。かれの出自を記事にしたという週刊朝日に怒っている。結局、週刊朝日側が矛先を引つ込めて、謝罪し、連載記事の終結をいい、それでことは終わつたのだが、いったいなんなのだとおもった。週刊朝日が橋下某を相手に連載をはじめた決意をした裏には、それなりの倫理と論拠があったはずだ。父親がやくざだったとか、被差別部落のことが、それらを書くにあたってはそれ相応の倫理と論拠があり、批判されればそれに答えるだけの論理があったはずではないのか。橋下某からの批判を受けてどうと論戦をおこなえる弁論が用意されてあつたはずではないのか。それを人権問題だと橋下某に抗議されて、あつさりすべてを引つ込めてしまふのは週刊朝日側に記事を書くにあたって拠って立つ論拠がなかったということなのか。

だれも身内のことにはあまり触れてもらいたくないだろう（ぼくなんか自分のことにも触れてもらいたくない性格だ）。最近では個人情報とかいってそのことにはみように神経質になりすだけがいまもずっと残っている。

TV画面だけでしか見たことがないといえば石原某もそうだが、都知事を辞めて国政に参加する、とTVのなかで息巻いていた。若い者がだらしないからこんな老人がやらなければならぬのだ、と大見得を切っていた。「若い者がだらしない」のは石原某の基準で物事を考えているからだろう。自分が「愚鈍な政治家」だと気づいていないからだろう。かれは自分がやっていることはすべてが正義で、それが実行できないのは「悪の軍団」「官僚機構」があるからだ、という論理を常にふりまいている。「自分は常に正しい」「このことを「愚鈍」といわなくてなんといえはいいのだろう。石原某はもう60年近く前、「太陽の季節」という小説で芥川賞をもらったのだが、そのなかに、ペニスを突き立てて障子を破るというシーンなどがあって、石原某の自己顕示欲、権力欲、あるいは幼児性などはすでにかいま見られていたのだが、その自己顕示欲とか権力欲の発露を現在の政治機構、官僚機構への突破口とおもいこんでいる石原某を愚鈍といわずしてなんといえはいいのだろう。

これまた愚鈍な政治家田中女史が石原某のことを「暴走老人」と揶揄したとTVでいっていたが、これはいいネーミングだとおもった。ぼくも石原某ほどではないが「老人」だ。若いころは常に暴走していて、いろんなところで摩擦をおこした。

ぎているような気もするが。その個人情報に立ち入ったからには「マスコミの面目をかけた」それ相応の見識と論拠と覚悟があつたはずではなかったのか。

その記事を取材して書いたノンフィクション作家、佐野真一も「配慮が足りなかった、遺憾の意を表する」とかいつているが、それはないだろう。橋下某の権力志向、弱者切り捨てなどの考えをうみだした背景をあきらかにすることが目的だったら、連載一回目を批判されたといつて筆を折るのはノンフィクション作家として情けないではないか。週刊朝日が撤退するならばかの媒体を探せばいいではないか、と外野席のぼくはそうおもふのだが。

それにしても橋下某の記者会見での朝日新聞社に対する敵意丸出しの対応（まだ弁護士だったころ民放のレギュラー番組でいつも朝日新聞を揶揄していたことをおもいだした）は幼児性丸出しだった。週刊朝日の親会社ということで朝日新聞の質問を受けつけないといい、朝日新聞側は子会社といつても別会社なので編集権は週刊朝日にあるといい、橋下某は「だったら資本を引き上げればいい」というようなやりとりがあつて、では、その取材拒否に対して他の新聞社はどう対応するのかとみていたが、どうやら、その場で抗議することもなくスルーしていた。取材拒否という強権が使われているというのに。

ふと、佐藤栄作の記者会見のことをおもいだした。あのとき、新聞が批判されているのにTVは「それはおかしいじゃないか」ということにはならなかった。まずは報道することが優先する、といつてしまえばそれまでだが、新聞というマスコミが非難さ

あちこちで嫌われ、敬遠され、ときには袋叩きにあつたりしたこともあった。それが最近、世間並みな評価を受けることが多くなった。「ダイケさんもおとなになったねえ」。こんな悪い評価を受けても最近「そうすね」と受け流せることができる「つまらないおとな」になった。若いころはそういう人間が大嫌いだつたのに。この歳になって、自分を嫌いになるのは面倒だ。だから、愚鈍な政治家田中女史がもらした一言がとても気に入った。

まあ、老人がむやみやたらと暴走しても上っ滑りな自己満足になつてしまうだろうから、そこはほどをわきまえなければならぬだろうが、「暴走老人」も悪くはない。心配なのは、暴走できるだけの体力があるかどうかだ。「息切れする暴走老人」でおわつてしまふかもしれないが、なんとなく楽しみがでてきた。

と、その発言からしばらくして「暴走老人」命名者の田中女史が暴走してしまった。確信ある暴走だとおもっていたが、どうやらそうでもなく、数日で急ブレーキをかけてしまった。愚鈍な政治家ゆえだろう。

と、そんなこんなで、すつたもんだがあつたが、突然、国会が解散された。で、ふたたびすつたもんだがあつて、石原某と橋下某が合体してしまった。「波乱」をおこす（？）という期待が持たれているが、かれらが考えていることは、日本の国体とか、自主憲法とか、領土とか、靖国とか、まるで日本人としてのアイデンティティはそこにしかない、というようなアジをまき散らせている困つたひとたちだが、かれらは強い指導者に

なれる、と世間の一部ではおもわれているようだ。声高な指導者は小泉某で失敗しているではないかとおもっているのだ。

アメリカから憲法を押しつけられたとかれらは憤慨している。でも、ほんとうに憤慨しなければならぬのは、戦後、アメリカ崇拝主義的に日本人みずからが望んだアメリカ的経済手法ではないかとおもうのだが。

旧来の日本的秩序、終身雇用制とか、職業の規制とかが正しいとはいわないが、優秀な人材は他企業が高く買ってくれるとか、企業が買収や合併をして巨大さを誇るとか、株を瞬時に売り買いで利益を得るとか、いまだにわからないのは、アメリカではじまった格付会社とかいうやつで、たかが一企業の匙加減ひとつで国の価値が上がったり下がったりしている。あれは投資家向けの情報だけではないのか、そんなことが国の経済を左右するのか、と不思議でならないのだが、まあ、そこらへんは経済音痴のほくだからわかるうとしていないだけなのかもしれないが、あれはミシユランとかいう食べ物屋の区別をおもいださせる。もともと食べものなんていうのは個人の嗜好だから、そのひとがおいしいと感じるものがおいしい。それを星いくつとかいつてありがたがつている。有名店は予約でいっぱい、急にその料理を食べたいとおもっても食べられない。というより、ぼくのような貧乏人は注文をためらうような金額らしい。まあ、ミシユランは「まいうー」の世界だからお愛嬌の話だが。

世界はいまグローバリズムだそうである。政治も経済も文化も高知県は昔から貧乏県で零細企業ばかりだから貧乏には慣れているのだが。しかし、こんなことがつづく「派遣社員ではないではないか、正社員はいらないではないか」ということにながつていきはしないだろうか。

まあ、そういうこととは別に、100万円でも生きていけるひとは充分に生きていけるし、それでいいというひともいるから数量化して比較することに意味はないかもしれないが、客観的にみればやはり極端な世間になつていとおもう。

労働者を消費者として回収させながらまわっていく産業資本主義ならこの格差を容認すべきではないとおもうのだが。(まあ、こんなことをいっているのは過去の間人なのかもしれない)

競争ということでいえば、高品質なモノを他よりも安く、ということであらゆる労働力を求めて産業の空洞化がおこり、自由競争の名のもと利益を出し配分を多くすることが経営者の手腕だと、富む者はより富み、利益を出せない者は切り捨てられていく社会になつた。だから、企業も体力が落ち、利益が薄くなればリストラに走らざるをえなくなつてくる。ひとびとは収入の安定を求めて大企業に就職したがそれが担保されない世間になつていく。

前にも書いたことがあるのだが、コスト削減、リストラで日産自動車を再建させたというカルロス・ゴーンの年収は10億円をすこし切るくらいだそう。下請けを泣かせ、従業員をこき使って会社を儲けさせることが会社再建で、その報酬が10億円な

も環境も地球規模で拡大しながらヒトの営みが企画されているらしい。世界標準とかいう単位もでてきているようだが、ぼくとしてはかつてレヴィ・ストロースが、文字を持たない未開の集団にもそれぞれの文化と文明がある、とサルトルらの西欧中心主義を突き崩したものの考え方に惹かれるのだが、もうそんな理想を口にする時代ではなくなつていく。経済や産業の後進国がどれだけ搾取されていることか。

それに、そのグローバリズムを唱えている国におきていることは競争の過酷さやそれによる貧富の格差などで、先進国、と誇れるほどのことでもない状態だ。

いやいや、貧富の格差があるのは当然だし、世間とはもともとそういうものだろうが、最近の格差は極端すぎている気がする。どこまでが貧富の差の許容範囲なのか、そんなことは数量化はできないが、最近はどうなにか働いても100万円、200万円しか収入のないひとがいる。ぼくなんか若いころから貧乏だったから低収入でもなんとかやっているとおもっているが、昨今は大学が多すぎるせいだろうが、大学を出てもアルバイト程度の仕事しかないひとがいる。その一方で高所得のひとたちが増えているらしい。高所得のひとと付き合っていないので高所得のひとのことはよくはわからないが、低収入のひとが増えているのは現実だ。一度職を失うとなかなか仕事が見つからなくて、見つかったとしてもアルバイトか派遣職員の仕事しかない。もう20年も派遣職員の仕事をしているひとをしっている。正職員とおなじ仕事をやっているというのに一年ごとに契約が更新される。「来年一年の仕事」の安心である。まあ、

のか、と少々疑問におもってしまったぼくはもう古い人間なのだろうか。

石原某は日本はアメリカの妾だといった。ぼくはかれほど下品ではないのでそんなことはいわないが、日本的な文化をみずから否定してアメリカ的な経済活動が個としての自我を実現できるといふ幻想に溺れてしまった日本人はどう見てもマゾ的体質があるのではないかとおもう。アメリカという攻撃的な相棒を得ていままでも隠してきたM的体質が目覚まして、アメリカに鞭打たれば打たれるほど快感をおぼえているような気がするのだが。

いまままだ流行っているかどうかは知らないが、東京の片隅にはメイド喫茶とかいうのがあって、そこでは客は「ご主人様」と呼ばれるらしい。アメリカという鞭と飴を持った「ご主人様」に仕えてきた日本人が、そのS的快感を疑似体験するための、疑似アメリカ体験としての「装置」としてはおもしろい存在だ、とはるか遠くの高知から眺めていた。

いやいや、そうではなくて、「ご主人様」と、一過性のメイドに仕えられながらアメリカという真正なS経験を疑似体験しているふりをしながら、「ご主人様」と、メイドに軽蔑、侮蔑、嘲笑されることで長年培ってきたM的体質を増幅させているのかもしれない。そう考えてみると日本人というのはなかなか屈折した感性と感受性の持ち主で、国体とか自主憲法といった棒直的なアジテーションなんかふさわしくない国のような気がするのだが。

そんなことを書いておくとぼくは「平和憲法の護憲論者」と

おもわれるかもしれないが、前にも何回も書いたのだが、憲法を改訂するならしてもいいし、しないならそのままでもいいとおもっている。どっちでもいいだろうとおもっている。

もし改訂されることになって9条云々となったときは、ぼくはひとを殺したくも殺されたくもない、という個人的な理由で、戦争を放棄するというほうに一票を入れるだろう。いや、殺したくない、は自分の意思で可能だが(いや、可能ではないかもしれない)、ひとの在り方は自分のおもったとおりにははこぼさないものだ)、殺されたくない、は当然他人任せになってしまう。自分の死なんてどうしようもないものだ。

吉本隆明は、憲法9条はかけがえのないものだ、といっている。かれの言い分は、自分にとつて9条は理念なので、現実がどうであろうと理念としてこれを支持するが、それを現実化し平和国家を実現しようといっている9条の会の主張と、現実と離反しても理念としてこれを支持するという自分の説とは全然違う、というようなことをいっている。

吉本は理念だといっているが、ぼくは殺したくもないし殺されたくもないという利己的な理由だ。

国体とか自主憲法に頼らないといけないと主張するかれらは国体とか自主憲法に日本人としての生き方、在り方、アイデンティティを求めているが、日本人としてのアイデンティティなんていわれてもひとそれぞれだろう。

ぼくは日本という国に生まれて、日本という文化土壌のなかで育った。「日本的なモノの考え方」(こんな曖昧なものか

人税収入があれば日本の財政は黒字に転換する、というような評論家の話を聞いたことがあるが、ほんとうはどうだろう)

原発の有無もなかなか議論のつきないところだ。日本未来の党という急ごしらえの党が出てきて「卒原発」を旗頭にした。小沢某の傀儡党とかいわれているが、これからどうなるだろう。高知にいと小沢某というひとの性格などまったくわからないのだが、菅直人がブログに書いていたという言葉がネット上に転載されていておもしろく笑ってしまった。これが元総理のいう言葉かと。「小沢さんの傀儡でうまくいった例はひとつもない。気に入らないと電話に出なくなり、いじめ始める」。菅直人もいじめられたのだろうか。

原発反対のひとつにしてみても、原発が賄っていた30%のエネルギーを太陽光や風力などクリーンなエネルギーで補おうとしている。原発が引き受けていた30%のエネルギーを放棄して、この文明という欲望を30%後退させてもいいではないか、というようなぼくのような後ろ向きな考えはなかなか支持してもらえないだろう。

もしかしたら、50年ぐらいすれば、科学技術が発展して、地震がおきても安全な原発ができるかもしれないし、原発のゴミ問題にしてもゴミを簡単に処理してくれる装置を発明するかもしれない。そうなれば、いま、原発がどうのこうのという議論はなんだったのかということになる。それで万々歳である。あるいは、太陽光発電の蓄電器に画期的な技術が発明されて、原発も石油もいらぬ発電で世界がまわっていくようになるかも

方をしているとあちこちからクレームがつきそうだが、いまのところほかの言い方が見つからないので)で生きている。しかしそれらは、国体や憲法が保証したものではない。形や言葉に足りない日本という文化土壌が育成したことであって、ぼくはそういう曖昧模糊な、優柔不断な文化が好きである。政府や憲法に規定された世間なんて画一的で硬直的で非民主的ではないだろうか。

でも選挙ではなんとなくかれらがけつこう支持されてしまうような気がする。民主党があつちこつちそつちこつちみたいな政治をやってきたからなんとなく石原某や橋下某が政治をやきつとしてくれるというような幻想をひとびとは抱いているよ。だが、日本の国の形とか自主憲法を声高に叫んでいる安倍某の政党と石原某橋下某の連合軍が勝てば日本という国はますます賑々しくなりそうな気がする。(この号が出るころには結果がわかっているのだが)

福島の原発事故以来、ベック(社会学者)ではないが、産業近代からリスク近代、産業を生産の面からだけ見るのではなく、リスクの面から見なければならぬ、というふうになってきた。それでも日本の産業界はグローバルリズムの流れに負けては日本という国が成り立たない、と額に汗している。ここはひとつ汗を拭いて、突き出していた手足を引つめてみてはどうかとおもうのだが、なかなかそうはならない。中国で破壊された企業やデパートも再建して、中国市場でなんとか儲けていこうと努力している。涙ぐましいものだ。(企業が儲けて巨額の法

されない。それも万々歳である。世界のエネルギー問題は解決されて、人類は快適な生活を送れるようになるかもしれない。

しかし、エネルギーという欲望と暮らすことにかわりはない。ここはひとつ原発事故を機に、原発の負担していた30%の欲望を抑えた世間づくりをしてもいいじゃないか、とおもっているのだが、なかなか人間の欲望はいまある状態から後退するのはむづかしいようだ。原発事故というこんなおきな産業事故が起こったのだ。これを契機に社会の仕組み、経済の仕組みを考えなおす議論があつてもよかつたのに、「復興」を合い言葉に世間は「やさしさ」とか「癒し」とか「絆」という口触りのいい、耳障りのいい、曖昧な方向に流れてしまつて、「がんばれニッポン」などと世間の道は一本道になってしまつた。

だれも反対することのない正しさ、全円性に立つことの気持ちの悪さをぼくはもっているのだが。

iPS細胞のことをすっかり忘れていた。この細胞はまだまだ発展途中で実用化には何年もかかるそうだ。先天的な疾患や難病で苦しい生活をしているひとには朗報ではあるが、まだ先のことらしい。

日本ではiPS細胞からつくった目の網膜色素上皮細胞の移植で加齢黄斑変形症の治療を目指しているそうだ。加齢黄斑変形症というと室戸市在住のMさんが加齢黄斑変形症である。だから、詩を読むのも、詩を書くのも、奥さんの協力がなくてはならない。自分の目で詩を読み、詩を書きたいとずっと願っている。はやくMさんの目が治療されて、おもうぞんぶん詩を読

んで、詩を書いてほしいとおもう。

そういうふうには難病が治療されるぶんにはiPS細胞は朗報だろうが、万能細胞として生命の行方にも影響してくるようなことになれば、どうなってしまうんだろう、とあらぬ心配をしている。もつとも医学の発達は顕著で、最近では金を積めば陽子線治療とか、重粒子線治療とかで特定の癌も治療できるようになっている。ぼくだっていろいろ最新の医療技術の世話になっただけでここまで生きのびてきた。だから、病気とか生命の定義が時代とともに変化していくのはやむをえないこともあるのだらうし、病気で苦しむひとなどいなくなる世界がくることはそんなに悪いことじゃないという声が多数なのかもしれない。

2009年、34歳の若さで死んだ伊藤計劃のSF小説『ハーモニー』（早川書房）は個人用医療薬精製システムにつながれた、だれもが病むことがない、病気では死ぬことのない世界が舞台だ。iPS細胞が万能細胞なら、そういう世界が実現するともかぎらない。健康であるという基準により、テクノロジーマとて人間が支配される世界。健康がゆいいつ人間を生かしている理由。そんな世界は、意識や個がなくなり、ただ、システムだけが残る世界ではないだろうか。この手のSFは昔からあるにはあるのだが、このひとの小説は細部まで論理的で思索的で、示唆に満ちている。生きていたらもつとすごい小説を書いただろうと惜しまれる。

ひとの死（＝存在）は本来は差別されている。短い命と長い命がある。苦しむひとと苦しめないひとがいる。ひとは生まれながらに平等であるということはそれらを無条件に受け入れている前提があつてのことではないだろうか、とぼくはおもう。この小説ではひとりの少女がそんな世界に反乱を起こし、個人用医療薬精製システムを逆コントロールして、自殺者をつくりだす、という展開があるのだが、最後は「わたしはシステムの一部であり、あなたもまたシステムの一部である（中略）個はもはや単位ではなかった。社会システムこそが単位だった」世界に戻ってしまう。

iPS細胞という万能細胞は性行為なしで人間がつけられる世界をつくるだろうか。病気にかかれれば即iPS細胞が働いて長寿を満喫する世界がくるだろうか。まあ、ぼくが生きているうちにはそんなことはないだろうが、そう遠くない未来はどうなっているのだろうか。そういう世界が人類の最終の世界として用意されているのだろうか。それとも、Mさんの加齢黄斑変形症が治って、自分の目で詩を読んだり書いたりできるようになる喜びぐらいで人類はとどまっていることができるだろうか。

と、ネガティブなことばかり書いてきた。すこしはポジティブなことを書こう。

詩の楽しみかたにもいろいろあるのだが、詩人の語りを楽しむというのも楽しい。好きな詩人の語りを楽しみながらその世界を泳ぐのは快感のひとつでもある。そんな詩集をいくつか。相沢正一郎さんの詩集『プロスペローの庭』（書肆山田）から冒頭の作品「1（わたしのいない部屋は、明るい……）」。

の後、母の部屋はまだ文字に埋めつくされる前のまっさらな紙にもどった。
家具ひとつない空間で、わたしはなにもしないで膝をだいて横になっているのが好きだった。どこからか滲みでくる母のかすかなにおいに包まれ、どこからか聞こえてくる母の寝息に呼吸をあわせているうちに眠ってしまうのが好きだった。

わたしのいない部屋は明るい……皺のよったテーブルクロスの上の砂糖入れの壺、ワインの壺、魔法瓶、コーヒークップ、スイートピーの花が差されたコップが——肩をよせあつて風がとおすぎるよう祈っている家族のようにも、お互いに無関心にバス停でバスを待つ人たちのようにも見える。

テーブルの上にひらかれたわたしのノートは白いままだ。

世界が不意に終わった日、そうとは知らずに目覚める。いつもの朝のつもりで目覚める。ひとの姿が見られない部屋はそれでも昨日と同じのまま。そこには、キッチンやホールには母との思い出が染みついていて。

風が吹いてノートがひらかれた。カサカサともパタパタとも聞こえて、風の流れに乗って白いページが輝きはじめる。

たぶん「わたし」は意識だけの存在になっているようだ。皺のよったテーブルクロスの上の砂糖入れの壺の上をすり抜け、ワインの壺の上をすり抜け、魔法瓶、コーヒークップの上をす

り抜け、スイトピーの花が差されたコップの上をすり抜ける。しかし、不安ではない、不安定でもないし、恐怖もない。喪失感もなければ孤独感もない。どちらかといえば快い感覚がわたしを満たしている。世界は終わってしまったというのに。快い感覚がわたしを支配している。こんな快さはいままで感じたことがない。もしかしたらわたしに肉体があったなどということはないかの錯覚だったのかもしれない。

この詩集はそんな相沢さんの独白、語りを楽しむためにある。母のこと父のこと息子のこと、鳥のことカエルのこと花のこと、読んだ本のこと父が読んだ本のこと、夢のこと、自分のこと他人のこと生きていくすべてのものごと、生きていくもの生きていないもの、心動かされるもの心動かされないもの、ガラスの輝き陽の輝き目の輝き、それらの諸々のなかをすり抜けながら、相沢さんは事物との関わり方のひとつひとつを丹念に語り始める。

それらは、一編の物語を読んでいるような、一編の映画を見ているような、一幅の絵画を見ているような、バロック時代の組曲を聴いているような、そんな至福な時間を相沢さんと共有できることの楽しさを楽しむことができる。それは詩集を読むということの至福な時間を相沢さんに贈られたとおもっている。

岡野絵里子さんの新しい一冊もまた、岡野さんの語りに誘われて一幅の絵画が現前し、物語がひとかれ、その背後から聞こえてくる音楽がその物語を増幅させてくれる。そして岡野さんもまた意識だけの存在として読者の意識に転移する。この一

る過去の子ども 眠れぬ夜から起き上がり 朝の夢の中
に更新される新しい名前

湧き立つ騒音が消え 列車は地上に出た 湾に沿って
乗客たちは光になびく 眠る人も 起きて夢みる人も
静かな髪が流れる 夢の滲すじのように

沖から雲が近づいて来る 紫色の夕闇を連れて 車両
はつながってその中へ入って行く

この一冊は「秋」からはじまって季節をひと巡りして「秋」で閉じられる。岡野さんの季節とひとと、意識をめぐる物語が丹念に静かに語られる。ほくはその語りのなかにこめられた岡野さんの息の色とにおいとかたちを存分に楽しませてもらった。

鈴木東海子さんは列車を乗り継ぎ、イングランドの町を歩く。そこから現実と思索が交差する物語が語られる。彫刻家、バーバラ・ヘップワースの作品を巡る旅は「訪れる所には彫刻があり形があるように言葉があり、私は形をつくるように詩を書きつづける旅である。だから、「このように野を歩いておらますと、ふと立ち止まり窓からの風景が懐かしくなるのです。窓からの風景はここにあり」それらは「野は庭の続きのように」鈴木さんの懐におさめられる。その旅で鈴木さんが目にしたものを物語る時、読者はその物語の背景となっていく。そういう旅である。

冊もまた岡野さんからの至福な贈りもののような気がした。

『陽の仕事』（思潮社）から「呼ぶ声」。

夏の体温が次第に空から失われていった 新しい高層ビルが目の中を伸び 街路樹が軽くなつた葉を散らす月

私たちは眠らない瞳 高みから舞い降りて来るものを信じて 夜の重さに耐える黒い石 だが訪れる朝もまた光に満ちた夢のひとつ 開かれて また閉じる夢の地図に その日私は どんな地名で記されたのか

穏やかに呼びかけられた時 私は書きかけの詩のことを考えていた いつものように 人々から離れ 言葉とだけ親しく 私自身の内に退いて

声は優しく私を壊す ささやかな自負と言葉を剥がし 素裸の私を時間の水辺に跪かせる 何も持たない赤子に還り もう一度世界を見上げるまで

私は確かに水を潜った 間近な時間ほど疾く 古い物語ほどゆっくりな 奇妙に鮮やかで意味深い 光の紐で束ねられた一枚一枚 いいえ 思い出しはしない ただ夢を通り抜けただけ

遠くから訪れて来るものよ 私たちは日々生まれ落ち

詩集『草窓のかたち』（思潮社）から最後に置かれた一編「海のかたち ポーツミア海岸」。

砂のくぼみは高さが定位置にとどまりわたしが坐っているわたしたちが坐っている高さなのである。押しよせてくる波がきて灯台がかすんで見える日もあっただろう。足もとに漂い連のやさしさでさする日もあっただろう。漂う水量を両手でかかえるかたちをつくってみた。砂浜のかたちになるのだった

海の形 (Sea Form-Forthmer 1958)

湾曲した銅板の厚みのある形体は横長に広がり遠方を見る空間である。抱え込む多種の漂いを陸地に届ける動作のようでもある。ポーツミア海岸の地形をした輪郭は海という流体を視覚的にとらえた抽象的な形体となつてはいるが変動の自在さが感じられる。包み込む優しさと強さが共存するのである。

いく月もいく年も坐っている砂のくぼみは身体が同化するように坐るのである。

漂うあたたかさをかかえてみる。手を広げると熱帯の国の海につづいているのを知るのである。

《待っているよ。
《めぐっているね。
くずれてしまいやすい砂の

くたれてしまいやすい草の
青いくぼみに形の重みもゆだねて
草の眼に虹がかかる。

この一冊はいろんな場所、いろんな人物、鈴木さんのいろんな思いが入り交じっている、このように一編だけ紹介してもこの詩集の楽しみは語れないのだが、鈴木さんはイン格蘭ドの土地、現実の土地を歩きながら、彫刻家とその彫刻、それをとりまく人々とモノのこの世界での在り方をたずねている。ヘップワースの足跡をたずねることで鈴木さんの足跡が鮮やかに刻まれていて、鈴木さんの思索の底に触れたいという感情がわいてくる一冊だった。

秋川久紫さんから『戦禍舞踏論』（土曜美術社出版販売）という詩集を戴いた。前三冊とは異質な意識の展開が施されていて愉しく読ませていただいた。集中から巻頭の「戦禍舞踏論」。

ここまで来れば、もはや追っ手は現れないだろうという見立ては、鉄楔や吹き矢や砲火が奏でる室外楽によって、幾度となく棄却された。さらに、緑色の血飛沫の聖洗を受け、追憶のフィルムを無自覚に再生することは、直ちに己の破綻を意味するのだと、否応なく知らされた。漸く辿り着いた隠れ家の中には、監視のための仕掛けが幾重にも施されていて、どれだけ配線を付け替えてみた所で、その底意地の悪さを無化することなど到底かなわなかった。

けの存在となった秋川さんが物語る世界を読者が楽しむことで、秋川さんの紡ぎ出す言葉の礫を読者の身体が引き受けることで愉楽悦楽を感じることができる仕組みになっている。秋川さんが練りだす言葉にどれだけ打たれて、どれだけ血を流せるのか、読者のマゾ的な資質が確かめられる、といってもいいのかもしれない。あるいは秋川さんが練りだす白象や獅子や麒麟や孔雀といった美学的無意味さに読者の心底に閉じ込められている無意味さを解放できるかもキーポイントかもしれないし、秋川さんの言語の屈折したリズム感に読者が取り残していたみずからの吃音性をどう調和していくのか、それとも、秋川さんのしなやかな言語のたたずまいに、読者自身の硬直性が打ち碎かれるのか、あるいは、秋川さんのしなやかさに太刀打ちできなくて立ちすくむだけなのか、それとも、この絵画的音楽性を意味性に還元させるむだな力をついやすのか。楽しみ方はいろいろある。

もう一冊、岡田ユアンさんの『トットリッチ』（土曜美術社出版販売）から「呑み込む」。

律儀ですよ

字面のまま 呑み込んでしまうのですから、^{みなり}ハヤトが喉につかえたりしたって水で流し込んでしまいます。ちょっとと分解して折り曲げれば薬と同じくらい抵抗なく摂りこむことができるのに、その点^{くちん}□や^{ひん}日は流し込みやすいそうです。余談ですが、皆さんそれほど原型のまま熱心に呑み込んでないませんよ、そんな人見かけたらパフォーマー

さて。

白象も獅子も、麒麟も孔雀も、恐らくこの戒嚴の季節を瞬時に終わらせることはできないだろう。断片化してしまつた心を集積し、あるいは魂を強く反転させて、利他的にその舌先を浄めることができたとしても。

それはただ慈しみを湛えた阿弥陀如来や弥勒菩薩とて同じであり、それゆえ、我々は煌びやかな舞踏によって、やがて世界をプラチナ箔の一双屏風の中に塗り込める力を持った観音が現れるのを待つしかないのだ。

そう。

観音の誇り高く、伸びやかな姿態だけが、邪気や悪鬼を眩い月光の中に封じ込めることができる。そのしなやかな指は手負いの動植物たちを忽ち蘇生させ、リズムカルな脚の運びは末世を覆い尽くす風塵や雷鳴をも易々と統御してしまう。そして、虚空に美しき円環を浮かべ、即座にこれを断ち割り、その内側に碧い焰を立ち昇らせたかと思つと、一気にこれを霧散させる。戦禍の中にあつては心優しき祈りより、まず極限まで熟達した舞踏が必要なのだ。

秋川さんは「あとがき」で音楽性や絵画的、映像的、演劇的な側面を重視したい、と書いているが、この一冊も、意識だ

ンスだと思つたほうがいい。ほらよく、口を大きく開けながら上を向いて長い剣を呑み込んでいく、みたいなパフォーマンスあるでしょ、たいてい見る限り、外国の方がやっているようだけど、とにかく興奮した感じがわき上がってきます。疑いだしたらきりがありませんから、とりあえず信じてみようというスタンスで生きていくようにしているとのこと。作務的にするどい文字を盛りこまれたつて、とりあえずそのまま呑み込む、そのような文字こそ丸めやすいです。難なく呑み込めるのです。抵抗なく、しかしそれに何の意味があるのだと意味を持ち出してきたものですか、ややこしくなっていくのです。そうやってきますと壇上でのパフォーマンスは困難になってきますね。皆さん思い思いの方向を見るようになるわけですから、最近では傷つかず呑み込める新しい文字が発明されているとかいないとか、外国人の呑み込んだ剣も口に入れた途端に歯が引っこむように開発されていたりするのでしょうから、生身の体を鍛えるよりそのほうが早いですよ、そんなに変わるものはありません。

失礼、奥歯にいつぞやの^{みなり}ハヤトが挟まっています。

世間はこのようにいとも簡単に呑み込んでしまう。なんでもかんでも、手当たり次第、そこにあるものもないもの、字面のまま呑み込んでしまう。ちょっと工夫すれば抵抗なく呑み込めるものも喉につかえつつかえ呑み込んでいる、ふりをして、ほ

んとうは長い剣を呑み込むようなイカサマを使っているのだが、まあ、そう目くじらをたてることもないだろう。鯛の頭も信心からというではないか、なにもかも信じてみようとおもう心と、作爲的にするどい文字を呑み込むことにそう違いはないのだから。世間とはそんな優柔不断、虚々実々、ぬらりひよんみたいものだから、ときたま^ムが齒にはさまった演技をしていたとしても、渡る世間に鬼はいないのだから。

で、世間が呑み込むものってなんだろう、と考えると、これがまた、長い剣を呑み込むようなイカサマに近いもので、わたしであつたり、あなたであつたり、いやいやそれらが勝手に嘔吐している規則や規律、制度や習慣、世間の決まりごとや、決まらない正しいこと間違っていること、倫理や論理や根拠といったほとんどイカサマともいっていいものだが、わたしやあなたが生きていくうえには不自由で便利なものだとしか、いまは、そのようにあいまいないかたしかできないが、その実、あなたやわたしが一番知っている「律儀」なやつである。

岡田さんの一篇を読みながら、そんな勝手なやつがぼくの世間を横切っていた。

若松孝二が交通事故にあつて入院していたが10月17日死去。76歳。ひとは不意に死ぬ。高校時代から付き合った監督のひとりが亡くなった。

大西順子が引退を表明したと新聞に載っていてびっくりした。

高知にいと大西順子の生演奏なんか聴く機会はないが、『WOW』というアルバムを買って、そのパワフルなスイングさが気に入ってCDを買ひそろえた。ぼくは日本のジャズはあまり聴かないのだが、彼女の演奏だけはなんとなく気に入ってよく聴いていた。これから彼女の新しい演奏が聴けなくなるのはすこしさみしい気がする。

引退理由が、自分のための演奏はできても観客を満足させる演奏ができなくなった、ということ、これからは若い演奏家のサポートにまわるらしい。まだ40代半ばだろうに。まあ、そう決意するにはそれなりの葛藤があつただろう。でも、「観客を満足させられないかあ」とすこし考えてしまった。詩の世界には厳密な意味での読者がいるのかどうかは議論のあるところだろうが、すくなくともspaceを読んでくれる人たちにspaceは何かを「満足」させているのだろうか。spaceの到着を心待ちにしてくれているのだろうか。閉ざされた世界のことではあるけれども。などちよつとネガティブな気持ちになつてしまった大西順子の引退表明記事だった。